

# 令和4年度 秋期 保健だより

## ——子どもに多く見られる皮膚トラブル——



### \* とびひ (伝染性膿痂疹)

虫刺されやすり傷の部位に細菌が繁殖して、水疱や膿疱ができる感染症。患部を掻いてしまうことで、中の液が染み出て他の部位に飛び火する。

**治療** 亜鉛華単軟膏や抗生物質の軟膏を用いる。

ひどくなると抗生物質の内服や点滴も必要となることがある。

### \* みずいぼ (伝染性軟属腫)

伝染性軟属腫ウイルスに感染することによるイボ(良性腫瘍)イボの中にはウイルスが含まれているため引っ掻くなどしてウイルスに触れると感染する可能性がある。

イボを取り除く場合は、家庭では行わず病院を受診すること。

### \* 感染肌・乳児乾燥性湿疹

幼児～学童期は皮脂の分泌量が少なく乾燥肌になりやすい。肌の痒みから皮脂を掻いてしまい炎症が起きたものを小児乾燥性湿疹という

**対処** 保湿などのスキンケアを心がけると同時に皮膚を強くこする。湿疹を掻くことは避ける。痒みが強い時には、抗ヒスタミン剤の内服やステロイド概要在で対応する。

※アトピー性皮膚炎に関しては、治療が長期間に渡ることが多いため医師の指示に基づいた治療が必要となる



### ステロイド外用薬 (副腎皮質ホルモン)

効き目の強さ、5段階に分類⇒症状の重さや部位・年齢などに合わせて使い分けられる。症状が軽くなった場合には、ランクの低いものに切り替える。





ただし、効き目に頼って長期にわたって強いステロイドを使用し続けると、皮膚が薄くなり、弱くなることもある。

(特に顔では血管が浮き出て赤ら顔になったり、にきびができやすくなる)子どもは顔や脇、股間に塗る場合は注意が必要。

### ☆湿疹などの炎症に用いるステロイド外用薬について

- 乳児や幼児の皮膚は大人に比べて薬剤が浸透しやすいため、年齢に応じた強さのランクを選ぶ。
  - 市販のステロイド外用薬を購入する時には、薬剤師に相談し、使用する部位などを詳しく伝えること。  
市販のステロイド外用薬は2週間を目安にし、5～6日間使用して改善が見られないようであれば、使用を中止して医療機関を受診するようにしましょう。
- ☆子どもの皮膚トラブルは保護者の判断のみで治療を行っている場合によっては症状が悪化し、感染症疾患の場合は周囲にも影響を及ぼしかねないので、症状によっては早めに病院を受診して適切な治療を受けましょう。

### ☆日常生活において気をつけること☆

- 清潔  
濡れタオルなどで優しくおさえるように汚れを落とす。特に寝起きに行くと効果的。
- 保湿  
汚れを落とした後は皮膚が乾燥するため、湿疹が出来やすくなる保湿クリームなどを塗布する。
- 爪切り  
子どもは湿疹があると無意識に掻くので、爪で皮膚を引っ掻かないように常に爪は短く切っておく。
- 洗濯  
合成洗剤では洗浄成分が肌に刺激となることがあるので、ベビー用洗剤などの低刺激性の製品を使用すると良い。
- 衣類  
上下つなぎになっている衣類より、セパレート型の方が通気性に優れる。素材は木綿が肌触りもよい。